

思春期の子どもを持つ保護者に適用できるペアレント・トレーニング の開発に向けた基礎的研究 ー国内大規模二次データと日次データを用いた検討ー

広島大学 西 村 由貴子

A Fundamental Study Toward the Development of Parent Training Programs for Parents of Adolescents: Analyses Using Large-Scale Secondary and Daily Diary Data in Japan

Hiroshima University, NISHIMURA, Yukiko

要 約

本研究は、思春期の子どもを持つ保護者に適用可能なペアレント・トレーニングを開発するために、養育行動が子どもの心理的特性に与える影響について検討した。研究1では、国内大規模縦断データ「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2019」のデータに対して、ランダム切片交差遅延モデル（RI-CLPM）を用いた分析を行った。その結果、母親の肯定的応答性および意思の尊重に対する子どもの認知が、次時点の自尊感情やキャリア意識を高めることが示唆された。研究2では、中学生とその両親199組（N = 597）を対象に31日間の日記調査を行った。マルチレベル相関分析の結果、子どもが認知する肯定的応答性や意思の尊重が、子どもの自尊感情・キャリア意識と正に、抑うつと負に関連することが確認された。これらの結果は、思春期の親子関係の理解に日次レベルの検討が有効であることを示している。

【キーワード】 ペアレント・トレーニング, 養育行動, 二次分析, 日記法

Abstract

This study explored the effects of parenting behaviors on adolescents' psychological characteristics to provide a foundation for developing parent training programs for parents of adolescents. Study 1 analyzed data from the large-scale longitudinal Parent-Child Survey on Children's Lives and Learning (2015-2019) using a Random Intercept Cross-Lagged Panel Model (RI-CLPM). The results suggested that adolescents' perceptions of mothers' positive responsiveness and respect for autonomy predicted higher levels of self-esteem and career awareness at the subsequent time point. Study 2 conducted a 31-day daily diary survey with 199 families (N = 597) consisting of junior high school students and their parents. Multilevel correlation analyses showed that adolescents' perceptions of

parental positive responsiveness and respect for autonomy were positively associated with self-esteem and career awareness, and negatively associated with depressive mood. These findings indicate that daily-level analyses can provide valuable insights into parent-child dynamics during adolescence.

【Keywords】 parent training, parenting behavior, secondary analysis, daily diary method

問 題

ペアレント・トレーニング（以下、PTとする）とは、親や保護者を対象に、効果的な褒め方や叱り方などの養育スキルを習得してもらうことで、子どもや家族の援助を試みる介入プログラムを指す。PTは子どもの抑うつ、および親の育児ストレス低減に効果があるとされ（Iida et al., 2018）、国内では主に乳幼児や発達障害の子どもを持つ母親を対象としたプログラムが数多く開発されている（中西・小松, 2021; 山口他, 2021）。

一方で、内閣府（2021）の調査によると、子どもの年齢や障害の有無にかかわらず、20～40代の保護者の43.1%が「子育てによる精神的疲れが大きい」と回答している。保護者の精神的健康の悪化や育児ストレスは児童虐待の重要なリスク要因の一つとされている点を踏まえると（中村・高橋, 2013）、定型発達の思春期の子ども（以下、思春期の子ども）を持つ保護者に対しても、PTをはじめとした子育てに関するサポートの拡大や普及が望まれる。

欧米では、科学的根拠に基づく治療（evidence-based treatment）の立場から、思春期の子どもを育てる保護者を対象としたPTの開発や効果検証が盛んに行われている（e.g. Beelmann, et al., 2023; Leijten et al., 2012; Morgan et al., 2024）。しかし、国内ではその前段階として思春期の子どもを持つ保護者の養育行動に関する基礎研究が不足しているために（加藤他, 2022）、PTの開発さえ不十分な現状にある。

特に不足しているのは、一時点の横断調査データ以外を用いた研究知見である。近年、基礎研究から応用研究（臨床場面での適用）に展開するには、①大規模データによる一般化可能性の確保、②介入目標となる変数の因果効果の立証、③その効果に対応する心理・行動プロセスの修正に資する知見の蓄積が重要視されている（Ehring et al., 2022）。しかし、思春期の子どもとその保護者を対象とした国内研究のほとんどが一時点の調査データを用いた研究報告にとどまっており（e.g. 村山他, 2018; 石津・安保, 2009; 信太, 2009）、保護者の養育行動が子どもに与える因果効果について判断できない。例外として、中高生とその母親を対象に3年間にわたる3時点の縦断調査により収集されたデータに対し、階層的重回帰分析を実施した渡邊・平石（2010）がある。この研究では母親の「理解・関心スキル」が子どもの自尊感情や不適応に影響を与えると報告しているものの、Time 1で2242名だった回答者がTime 3で187名に減少しており、調査対象者の偏りが懸念される。

加えて、縦断データの分析手法にも改善の余地がある。近年、縦断データから因果効果を正確に推定するために、ランダム切片交差遅延モデル（RI-CLPM）などの統計モデリングの使用が推奨されている（Orth et al., 2021）。しかし、渡邊・平石（2010）で階層的重回帰分析が使用されている点が

示すように、国内のPT研究は基礎的知見の少なさに加え、使用される分析手法にも問題を抱えている。

これらの問題を解決するため、本研究ではまず、国内の大規模縦断データを用い、RI-CLPMを適用することで因果的関連を検討する（研究1）。これにより、先行研究で指摘された①サンプルの偏りによる代表性の低さ、および②因果的影響の検討不足という課題に取り組む。さらに、補足的な検討として、31日間の日記法による検討により、日ごとの変数間の関連を個人内・個人間レベルで検討する（研究2）。この二段階の検討により、思春期を対象とするPT開発の基盤となる知見の提供を目指す。

研究1：大規模縦断データを用いた養育行動と子どもの心理的特性の因果的関連の検討

方 法

調査対象者 東京大学社会科学研究所・ベネッセ総合教育研究所が実施した「子どもの生活と学びに関する親子調査2015-2019」を二次利用した。本調査は、全国の母子・父子と小学校1年生から高校3年生までの子どもを対象とした1年ごと4時点の縦断調査である。研究1では、Time 1からTime 4の間に少なくとも1年以上中学校に在籍していた子ども（小学校4年生から中学校3年生までの子ども）とその保護者とのペアデータを抽出し、さらに4時点すべてに回答していた母子4021組、父子240組を分析対象とした。母親の平均年齢は、43.3歳（ $SD = 4.39$ ）、父親の平均年齢は45.3歳（ $SD = 5.33$ ）、子どもの平均年齢は12.2歳（ $SD = 1.76$ ）であった。

使用した尺度 養育行動については、伊藤他（2014）の尺度を参考に、保護者用調査票における「いいことをしたときにほめる」を「肯定的応答性」、「子どもがやりたいことを応援する」を「意思の尊重」、「親子で意見が違うときは親の意見を優先する」を「意思の尊重」の逆転項目として使用した。本研究では、「子どもの生活と学びに関する親子調査」において測定されていた項目のうち、伊藤他（2014）の肯定的養育行動の下位尺度に対応し、かつ思春期における自己評価や動機づけの形成に理論的に関連が深いとされる（Zhao et al., 2024）これらの変数を分析対象とした。さらに、養育行動に対する子どもの認知も、保護者の各質問項目に対応する項目（例：（あなたのお父さん・お母さんは）「いいことをしたときにほめてくれる」）を使用した。さらに、これらの養育行動が影響を与える変数の候補として（西村他, 2024）、子ども用調査票における自尊感情やキャリア意識に対応すると想定される項目（「自分の良いところが何かを言うことができる」、「自分でできることは自分でする」）を使用した。回答はすべて「1. とてもあてはまる」から「4. まったくあてはまらない」の4件法であり、得点が高いほど各変数の水準が高いことを示すよう逆転処理して使用した。

分析には、RI-CLPMを使用した。RI-CLPMは、従来の交差遅延モデルの拡張版となる分析手法であり、個人間・個人内の変数間の変動を同時に把握できる点に強みがある（Krauss & Orth, 2024）。本研究では、父子および母子データをそれぞれ独立したモデルとして分析し、子どもの心理的特性についても自尊感情とキャリア意識の2種類を区別して検討した。

研究1の結果の予測を以下に示す。

第一に、養育行動に対する保護者の認知が、その養育行動に対する次時点の子どもの認知に正の影響を与える。

第二に、子どもが認知する肯定的応答性／意思の尊重が、次時点の子どもの自尊感情／キャリア意識に正の影響を与える。

第三に、子どもが認知する意思の尊重の逆転項目が、次時点の子どもの自尊感情／キャリア意識に負の影響を与える。第二に、子どもが認知する肯定的な養育行動（例「いいことをしたときにほめてくれる」）が、子どもの自尊感情、自律性、キャリア意識に正の影響を、抑うつに負の影響を与える。

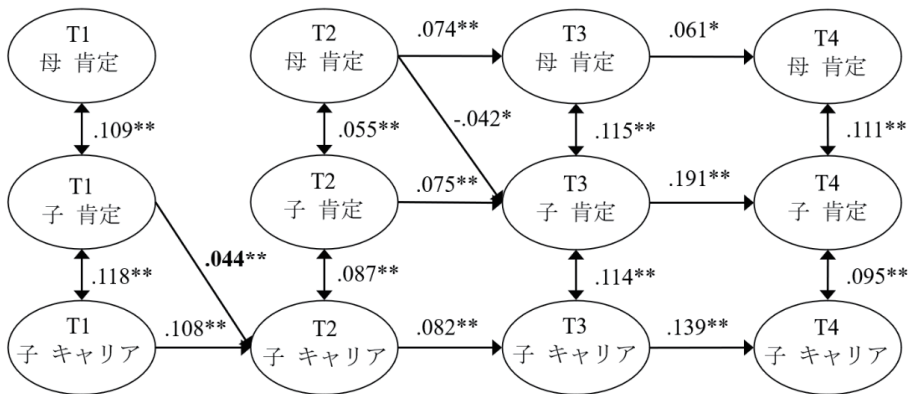
第三に、子どもが認知する否定的な養育行動（例「何にでもすぐに口出しをする」）が、子どもの自尊感情、自律性、キャリア意識に負の影響を、抑うつに正の影響を与える。

結 果

RI-CLPM による分析の結果、母親の養育行動に関していくつかの有意な交差遅延パスが確認された。有意な交差遅延パスが確認されたモデルを、図1. から図3. に示す。なお、図の視認性を重視し、本研究では潜在変数と統計的に有意であったパスのみを図示している。また、本研究ではすべての分析について、Benjamini-Hochberg 法 (Benjamini & Hochberg, 1995) による FDR 補正を実施している。

母親の養育行動の影響

肯定的応答性とキャリア意識 Time 1 における母親の肯定的応答性に対する子どもの認知が、Time 2 の子どものキャリア意識に有意な正の影響を与えていた ($\beta = .044, p < .05$)。

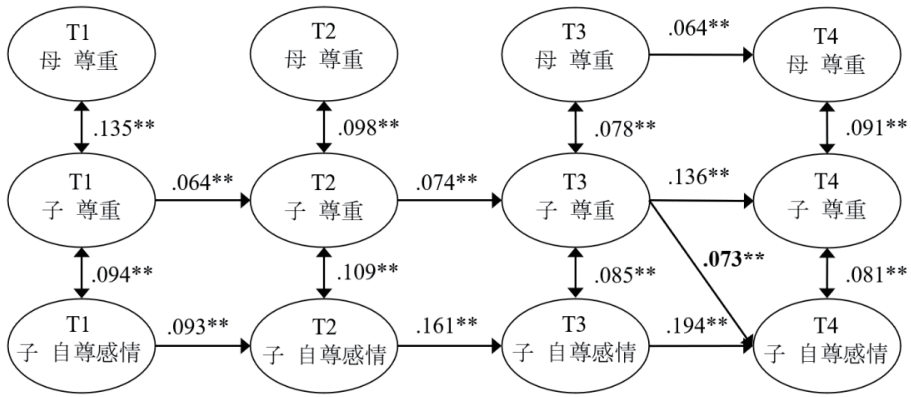


* $p < .05$, ** $p < .001$

CFI = .997, RMSEA = .020, SRMR = .001

図1 母親の「肯定的応答性」が子どものキャリア意識に与える影響

意思の尊重と自尊感情 Time 3 における母親の意思の尊重に対する子どもの認知が、Time 4 の子どもの自尊感情に正の影響を与えていた ($\beta = .073, p < .01$)。

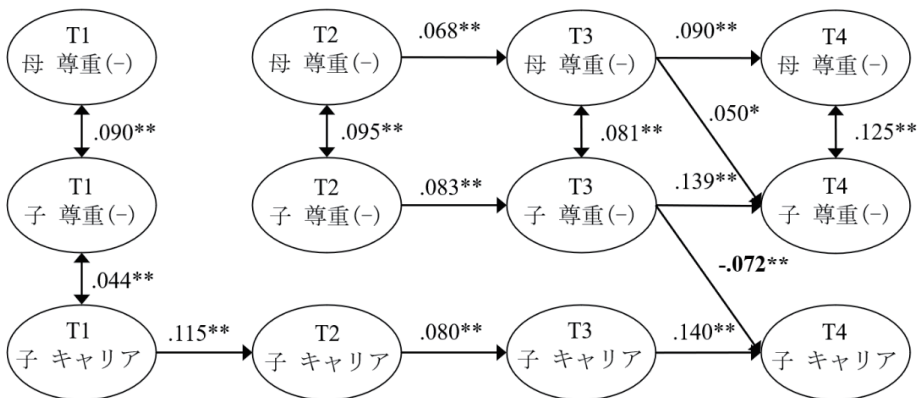


* $p < .05$, ** $p < .001$

CFI = .995, RMSEA = .027, SRMR = .016

図2 母親の「意思の尊重」が子どもの自尊感情に与える影響

意思の尊重 (逆転項目) とキャリア意識 Time 3 における母親の意思の尊重の逆転項目に対する子どもの認知が、Time 4 の子どものキャリア意識に負の影響を与えていた ($\beta = -.072, p < .01$)。



* $p < .05$, ** $p < .001$

CFI = .997, RMSEA = .017, SRMR = .001

図3 母親の「意思の尊重 (逆転項目)」が子どものキャリア意識に与える影響

補足分析として、まず、図 1. から図 3. における「養育行動の親の認知 (t 時点)」→「子ども認知 (t 時点)」→「子どもの心理的特性 (t+1 時点)」の得点間のうち、子ども認知から子どもの心理的特性への交差遅延パスが有意であったパスについて間接効果の検定を実施した。その結果、意思の尊重（逆転項目）モデルにおいて、有意な間接効果が認められた ($\beta = -0.006, p = .020$)。次に、有意な交差遅延パスに対し、学年間で等値制約を課した多母集団同時分析を行った。その結果、すべてのモデルにおいて、制約ありモデル（等値モデル）が採択された（肯定： $\Delta\chi^2(5) = 3.43, p = .63$, 意思： $\Delta\chi^2(5) = 3.59, p = .63$, 意思（逆転項目）： $\Delta\chi^2(5) = 4.53, p = .48$ ）。このことから、交差遅延効果の大きさと方向は学年によらず概ね同程度であり、母親の養育行動は子どもの学年にかかわらず、特定の測定時期に有意な影響をもたらす可能性が示唆された。

父親の養育行動の影響

一方で、父親の養育行動に関しては、いずれのモデルにおいても有意な交差遅延パスは確認されなかった (CFI = .986 ~ .999, RMSEA = .001 ~ .044, SRMR = .022 ~ .029)。

考 察

研究 1 の結果、母親の養育行動に対する子どもの認知の一部が、思春期の子どもの心理的特性に有意な影響を及ぼすことが示唆された。具体的には、母親の肯定的応答性や意思の尊重に対する子どもの認知が、子どもの自尊感情やキャリア意識を促進する方向に働き、反対に、親の意見を優先するようなかわりに対する子どもの認知は、子どものキャリア意識を低下させる方向に働く可能性が示唆された。これらの結果は、予測を一部支持する結果であるとともに、親からのサポートが思春期の青年の肯定的自己信念に寄与することを示した Chentsova-Dutton et al. (2020) の知見や、母親の自律性支援が中学生の自己評価を高め、それがキャリア適応を促進することを示した Zhao et al. (2024) の知見とも整合する。

Hamaker et al. (2015) は RI-CLPM の効果量は個人内の変動を対象とするため小さくなりやすいと指摘している。さらに子どもの心理的発達には、長期にわたる微細な相互作用の積み重ねによって形成されるため (Rothenberg et al., 2020)、効果量としては小さな水準であったとしても、それが長期にわたる場合には臨床的介入において重要な意味を持つとされる (Lundahl et al., 2005)。研究 1 で確認された効果はいずれも小さいながらも有意であり、母親の養育行動に対する子どもの認知が 1 年後の心理的特性に影響を及ぼすことを示した点は、PT によって強化すべき養育行動の特定に資する重要な知見であるといえる。

父親の養育行動に関しては、すべてのモデルにおいて有意な交差遅延パスが確認されなかった。しかし、本調査データは測定期間が 1 年間で長期にわたっていたために、養育行動の日々の変動と子どもの心理的特性への影響を捉えきれなかった可能性がある。さらに、父子ペアのサンプル数は母子ペアに比べて顕著に少なく、サンプルサイズの不足によって推定の安定性が低下し、効果が検出され

なかった可能性もある (Usami et al., 2019)。

したがって、父親の影響をより正確に把握するためには、日常生活における短期的な変動を追跡できるデザインが必要である。研究 2 では、そのような日常的影響を精緻に検討するための予備的検討として、父母の養育行動（親報告）と子どもが認知した養育行動、および子どもの心理的特性が日単位でどの程度変動するかを確認するとともに、それらの関連を個人間・個人内の両レベルで検討することを目的とした。

研究 2：父母の養育行動と子どもの心理的特性の日間変動：日記法による予備的検討

方 法

調査対象者と手続き 本研究は、中学 1 年生から中学 3 年生までの子どもとその両親を対象に実施した。調査期間は 2025 年 9 月 5 日から 10 月 5 日の 31 日間であり、1 日 1 回、Web 上での回答を求めた。調査会社（株式会社マクロミル）を通じて、父親または母親のいずれかに調査協力を依頼し、その配偶者および子どもが同一端末を用いて回答した。回答データにはタイムスタンプが記録されており、対象日から 24 時間以内に記録された回答のみを分析対象とした。最終的に 199 組（父母子計 597 名）から有効回答が得られ、1 人あたりの平均回答日数は 28.38 日 ($SD = 7.08$) であった。欠損値については多重代入法などの補完は行わず、完全情報最尤法 (Full Information Maximum Likelihood; FIML) により分析時に処理した。子どもの学年と性別の構成は、中学 1 年生が女子 32 名・男子 32 名、中学 2 年生が女子 34 名・男子 34 名、中学 3 年生が女子 34 名・男子 33 名であった。父親の平均年齢は 47.1 歳 ($SD = 5.49$)、母親の平均年齢は 45.2 歳 ($SD = 4.63$) であった。

倫理的配慮 本本研究は広島大学人間社会科学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施された（承認番号：HR-PSY-002977）。

使用した尺度 研究 2 では、先行研究（伊藤他，2014；西村他，2024）を参考に、日次測定に適するように表現を調整した項目を使用した。養育行動は、両親に対して「子どもを褒めたり、ありがとうと言ったりした」（肯定的応答性）、「できるだけ子ども自身の意思を尊重した」（意思の尊重）、「子どもへの叱り方が自分の気分によって変わった」（非一貫性）を尋ねた。また、子どもにも同内容の項目を「お父さんに褒められたりありがとうと言われたりした」などの形式で提示し、父親・母親の養育行動に対する認知を尋ねた。さらに、子ども自身の心理的特性として、自尊感情（「自分自身に満足だと感じた」）、キャリア意識（「自分でできることは自分でしようと感じた」）、抑うつ（「気分が落ち込んでいる」）の 3 項目を使用した。すべての項目は、「1. とても当てはまる」から「7. まったく当てはまらない」の 7 件法で回答を求めた。研究 1 と同様に、すべての項目に逆転処理を行った。

結 果

まず、各変数の平均値および標準偏差（個人ごとの日内標準偏差の平均値）に加え、個人間分散の割合を示す ICC（Intraclass Correlation Coefficient）を算出した。その結果、ICC は 0.44 ～ 0.61 であり、個人内で一定の変動が確認された（Gütges et al., 2025）（表 1）。

表 1 研究 2 で用いられた変数の記述統計量と ICC

変数	平均値	<i>SD</i>	ICC
肯定的応答性 (父)	4.63	1.76	0.52
意思の尊重 (父)	4.92	1.60	0.50
非一貫性 (父)	2.90	1.65	0.60
肯定的応答性 (母)	5.13	1.49	0.53
意思の尊重 (母)	5.32	1.31	0.53
非一貫性 (母)	3.06	1.60	0.61
肯定的応答性 (父・子認知)	4.46	1.79	0.54
肯定的応答性 (母・子認知)	4.97	1.52	0.54
意思の尊重 (父・子認知)	4.62	1.69	0.59
意思の尊重 (母・子認知)	5.07	1.38	0.55
非一貫性 (父・子認知)	2.96	1.64	0.59
非一貫性 (母・子認知)	3.08	1.67	0.56
自尊感情 (子)	4.96	1.36	0.53
キャリア意識 (子)	5.11	1.32	0.54
抑うつ (子)	2.79	1.55	0.44

マルチレベル相関分析

各変数間の関連を個人間（between-person）と個人内（within-person）の両レベルで検討するため、マルチレベル相関分析を行った（cf. Bakdash & Marusich, 2017）。すべての変数を個人平均中心化し、個人間成分と個人内成分に分けて相関を算出した。

その結果、親（母・父）の報告した養育行動と子どもの認知との間には中程度から高い正の相関がみられ、特に「意思の尊重」「非一貫性」では個人間 $r = .88 \sim .92$ 、個人内 $r = .51 \sim .54$ （いずれも $p < .001$ ）と高い相関を示した。さらに、子どもが認知した肯定的応答性と意思の尊重は、母親・父親ともに自尊感情およびキャリア意識と正に、抑うつと負に相関していた。親自身の報告も同様の相関を示したが、肯定的応答性と自尊感情・キャリア意識との相関の程度は、子どもの認知とそれらの変数の相関よりも小さいことが示された。

考 察

ICC の結果から、父母の養育行動および子どもの心理的特性はいずれも日次レベルで変動する動的な側面をもつ変数であることが示された（Bolger & Laurenceau, 2013; Nezlek, 2012）。さらにマル

チレベル相関分析の結果、子どもが認知した両親の肯定的応答性および意思の尊重は、自尊感情やキャリア意識と正に、抑うつと負に相関していることが示された。また、肯定的応答性と自尊感情・キャリア意識との相関の程度は、親報告よりも子どもの認知の方が強く、子どもの自尊感情やキャリア意識を育むには、親の肯定的応答性を高めるだけでなく、子どもが「褒められた」「感謝された」と認知していることが重要であることが示唆された。

これらの結果は、思春期の親子関係を理解するうえで日次レベルの検討が有効であることを示し、今後の因果的検討や介入研究の設計に向けた基礎的知見を提供するものとして意義がある。

総考察

本研究は、思春期の子どもを持つ保護者に適用可能な PT の開発に向け、養育行動が子どもの心理的特性に与える因果的影響を検討した。研究 1 では、大規模縦断データに RI-CLPM を適用し、母親の肯定的応答性および意思の尊重に対する子どもの認知が、次時点の自尊感情やキャリア意識を高める可能性を示した。得られた効果量は小さいものの、RI-CLPM は個人内変動を扱うため効果量が小さくなりやすく (Hamaker et al., 2015)、小さな効果でも長期的蓄積により臨床的意義を持ちうるとされている (Lundahl et al., 2005)。一方、父親では有意な交差遅延効果が検出されず、年単位の測定では日々の変動を捉え切れていない可能性が示唆された。そこで研究 2 では、この点を補うべく日常的変動を直接とらえるデザインを採用した。

研究 2 では、31 日間の日次データの ICC を確認することで、養育行動と子どもの心理的特性は日次レベルで変動することを示した。さらに、マルチレベル相関分析の結果から、養育行動における親報告と子ども認知の間に中程度以上の関連がみられること、子どもが認知する両親の肯定的応答性および意思の尊重は、自尊感情・キャリア意識と正に、抑うつと負に関連していることが示された。特に、父親の養育行動に対する子どもの認知と子どもの心理的特性との関連が認められたから、研究 1 で父親の効果が検出されなかったのは、測定間隔が長く養育行動の日々の変動を捉えにくかったことや、サンプル数の不足により推定が不安定であった可能性が研究 2 の結果によって改めて支持された。また、一部の養育行動では、親の自己評価よりも子どもの認知の方が心理的特性との関連が強く、親の行動そのものに加えて「子どもがどのようにそれを受け止めているか」を介入の焦点とする必要性が示唆された。

今後は、両親の養育行動が子どもに及ぼす因果的影響を精緻に検証する必要がある。具体的には、父母の養育行動の関連を統制しながらそれぞれの行動の変化が後の時点の子どもの心理的特性に及ぼす影響を検討することに加え、両親への心理的介入によりそれぞれの養育行動が変動するだけでなく、子どもの心理的特性も変動することを明らかにする。これらの追試的検討を行うことで、特に介入すべき養育行動を特定し、PT 開発につなげる必要がある。

表2 マルチレベル相関分析の結果

変数の組み合わせ	変数X	変数Y	個人間 r	p (BH)	個人内 r	p (BH)
母：養育 × 子：養育	肯定的応答性 (母)	肯定的応答性 (子)	.195	.006	.359	<.001
	意思の尊重 (母)	意思の尊重 (子)	.881	<.001	.511	<.001
	非一貫性 (母)	非一貫性 (子)	.896	<.001	.542	<.001
父：養育 × 子：養育	肯定的応答性 (父)	肯定的応答性 (子)	.475	<.001	.474	<.001
	意思の尊重 (父)	意思の尊重 (子)	.918	<.001	.529	<.001
	非一貫性 (父)	非一貫性 (子)	.878	<.001	.533	<.001
母：養育 × 子：心理的特性	肯定的応答性 (子)	自尊感情	.701	<.001	.333	<.001
	肯定的応答性 (母)	自尊感情	.202	.005	.119	<.001
	意思の尊重 (子)	自尊感情	.692	<.001	.346	<.001
	意思の尊重 (母)	自尊感情	.710	<.001	.270	<.001
	非一貫性 (子)	自尊感情	-.230	.001	-.061	<.001
	非一貫性 (母)	自尊感情	-.233	.001	-.093	<.001
	肯定的応答性 (子)	キャリア意識	.633	<.001	.284	<.001
	肯定的応答性 (母)	キャリア意識	.271	<.001	.090	<.001
	意思の尊重 (子)	キャリア意識	.688	<.001	.318	<.001
	意思の尊重 (母)	キャリア意識	.743	<.001	.244	<.001
	非一貫性 (子)	キャリア意識	-.246	.001	-.021	.113
	非一貫性 (母)	キャリア意識	-.259	<.001	-.071	.001
	肯定的応答性 (子)	抑うつ	-.375	<.001	-.093	<.001
	肯定的応答性 (母)	抑うつ	-.079	.270	.004	.771
	意思の尊重 (子)	抑うつ	-.381	<.001	-.127	<.001
	意思の尊重 (母)	抑うつ	-.409	<.001	-.095	<.001
	非一貫性 (子)	抑うつ	.492	<.001	.266	<.001
	非一貫性 (母)	抑うつ	.512	<.001	.227	<.001
父：養育 × 子：心理的特性	肯定的応答性 (子)	自尊感情	.615	<.001	.263	<.001
	肯定的応答性 (父)	自尊感情	.223	.002	.056	.001
	意思の尊重 (子)	自尊感情	.663	<.001	.209	<.001
	意思の尊重 (父)	自尊感情	.624	<.001	.286	<.001
	非一貫性 (子)	自尊感情	-.171	.017	-.064	.001
	非一貫性 (父)	自尊感情	-.225	.001	-.033	.028
	肯定的応答性 (子)	キャリア意識	.488	<.001	.212	<.001
	肯定的応答性 (父)	キャリア意識	.213	.003	.039	.023
	意思の尊重 (子)	キャリア意識	.550	<.001	.251	<.001
	意思の尊重 (父)	キャリア意識	.605	<.001	.205	<.001
	非一貫性 (子)	キャリア意識	-.235	.001	-.012	.824
	非一貫性 (父)	キャリア意識	-.256	<.001	-.031	.353
	肯定的応答性 (子)	抑うつ	-.284	<.001	-.036	.054
	肯定的応答性 (父)	抑うつ	-.102	.162	.002	.771
	意思の尊重 (子)	抑うつ	-.352	<.001	-.088	<.001
	意思の尊重 (父)	抑うつ	-.367	<.001	-.069	.003
	非一貫性 (子)	抑うつ	.555	<.001	.259	<.001
	非一貫性 (父)	抑うつ	.498	<.001	.223	<.001

文 献

- Bakdash, J. Z., & Marusich, L. R. (2017). Repeated measures correlation. *Frontiers in Psychology*, 8, 456. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2017.00456>
- Beelmann, A., Arnold, L. S., & Hercher, J. (2023). Parent training programs for preventing and treating antisocial behavior in children and adolescents: A comprehensive meta-analysis of international studies. *Aggression and Violent Behavior*, 68, 101798.
- Benjamini, Y., & Hochberg, Y. (1995). Controlling the false discovery rate: A practical and powerful approach to multiple testing. *Journal of the Royal Statistical Society: Series B (Methodological)*, 57 (1), 289–300.
- Bolger, N., & Laurenceau, J.-P. (2013). *Intensive Longitudinal Methods: An Introduction to Diary and Experience Sampling Research*. Guilford Press.
- Chentsova-Dutton, Y. E., Ryder, A. G., Tsai, J. L., Grossmann, I., & Ryder, J. M. (2020). Perceived parental support and adolescents' positive self-beliefs across cultures. *Frontiers in Psychology*, 11, 353. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.00353>
- Ehring, T., Limburg, K., Kunze, A. E., Wittekind, C. E., Werner, G. G., Wolkenstein, L., Guzey, M., & Cludius, B. (2022). (When and how) does basic research in clinical psychology lead to more effective psychological treatment for mental disorders? *Clinical Psychology Review*, 95, 102163.
- Gütges, I. D., Xi, H., Gauggel, S., & Forster, S. D. (2025). Mirroring minds: assessing the relative stability of self-appraisal and reflected appraisal in daily life. *Frontiers in Psychology*, 16, 1576353. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2025.1576353>
- Hamaker, E. L., Kuiper, R. M., & Grasman, R. P. (2015). A critique of the cross-lagged panel model. *Psychological Methods*, 20 (1), 102–116. <https://doi.org/10.1037/a0038889>
- Iida, N., Wada, Y., Yamashita, T., Aoyama, M., Hirai, K., & Narumoto, J. (2018). Effectiveness of parent training in improving stress-coping capability, anxiety, and depression in mothers raising children with autism spectrum disorder. *Neuropsychiatric Disease and Treatment*, 3355–3362.
- 石津 憲一郎・安保 英勇 (2009). 中学生の過剰適応と学校適応の包括的なプロセスに関する研究—個人内要因としての気質と環境要因としての養育態度の影響の観点から—. *教育心理学研究*, 57 (4), 442–453
- 加藤 承彦・越智 真奈美・可知 悠子・須藤 茉衣子・大塚 美耶子・竹原 健二 (2022). 父親の育児参加が母親、子ども、父親自身に与える影響に関する文献レビュー 日本公衆衛生雑誌, 21- 40
- 厚生労働省 (2024). 令和5年度雇用均等基本調査. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-23.html> (2025年10月14日取得).
- Krauss, S., & Orth, U. (2024). Family environment and self-esteem development in adolescence: A replication and extension. *Journal of Research in Personality*, 104511.
- Lundahl, B., Risser, H. J., & Lovejoy, M. C. (2005). A meta-analysis of parent training:

- Moderators and follow-up effects. *Clinical Psychology Review*, 26 (1), 86–104.
<https://doi.org/10.1016/j.cpr.2005.07.004>
- Leijten, P., Overbeek, G., & Janssens, J. M. (2012). Effectiveness of a parent training program in (pre) adolescence: Evidence from a randomized controlled trial. *Journal of adolescence*, 35 (4), 833–842
- Morgan, M. H. C., Huber-Krum, S., Willis, L. A., & Shortt, J. W. (2024). A Literature Review of Digital Behavioral Parent Training Programs for Parents of Adolescents. *Prevention Science*, 25(1), 155–174
- 村山 恭朗・伊藤 大幸・中島 俊思・浜田 恵・片桐 正敏・田中 善大・高柳 伸哉・野田 航・辻井 正次 (2018). 一般小中学生におけるいじめ経験と養育行動の関連に関する横断的検証. *Journal of Health Psychology Research*, 31 (1), 31–41
- 内閣府 (2021). 令和2年度少子化社会に関する国際意識調査 こども家庭庁
<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/index.html> (2025年10月14日取得)
- 中村 鮎美・高橋 道子 (2013). 母親の育児ストレスに関連する要因と精神的健康—育児へのサポートに着目して—. *東京学芸大学紀要. 総合教育科学系*, 64 (1), 259–266
- 中西 陽・小松 愛 (2021). 発達障害のある子どもの親に対する強み介入を取り入れたペアレント・トレーニングの検討. *奈良教育大学紀要. 人文・社会科学*, 70 (1), 177–186
- Nezlek, J. B. (2012). Multilevel modeling for diary data. In Mehl & Conner (Eds.), *Handbook of Research Methods for Studying Daily Life*. Guilford Press.
- 新見 直子 (2008). 中学生版キャリア意識尺度の開発. 広島大学大学院 教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域, (57), 225–233.
- 西村 由貴子・清水 陽香・中島 健一郎 (2024). 両親と子どもの自尊感情の関連における養育行動の媒介効果. *心理臨床学研究*, 42 (3), 229–238.
- Orth, U., Clark, D. A., Donnellan, M. B., & Robins, R. W. (2021). Testing prospective effects in longitudinal research: Comparing seven competing cross-lagged models. *Journal of personality and social psychology*, 120 (4), 1013
- 大島 智恵・佐藤 美理・反頭 智子・相原 正男 (2022). 注意欠如・多動症の子どもの養育者へのペアレントトレーニング終了半年後の効果. *山梨大学看護学会誌*, 20 (1), 17–22
- Rothenberg, W. A., Lansford, J. E., Bornstein, M. H., Chang, L., Deater-Deckard, K., Di Giunta, L., et al. (2020). Effects of parent warmth and behavioral control on adolescent externalizing and internalizing trajectories across cultures. *Journal of Research on Adolescence*, 30 (3), 835–855.
<https://doi.org/10.1111/jora.12566>
- 信太 寿理 (2009). 養育態度に関する中学生の母子関係の検討—母子間の認知における不一致と性差に着目して—. *家族心理学研究*, 23 (2), 65–78

- Sim, W. H., Fernando, L. M. N., Jorm, A. F., Rapee, R. M., Lawrence, K. A., Mackinnon, A. J., & Yap, M. B. (2020). A tailored online intervention to improve parenting risk and protective factors for child anxiety and depression: Medium-term findings from a randomized controlled trial. *Journal of Affective Disorders*, 277, 814-824
- 総務省統計局. (2021). 令和3年 社会生活基本調査. 総務省.
<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/index.html> (2025年8月29日取得)
- Usami, S., Murayama, K., & Hamaker, E. L. (2019). A unified framework of longitudinal models to examine reciprocal relations. *Psychological Methods*, 24 (5), 637-657.
<https://doi.org/10.1037/met0000210>
- 渡邊 賢二・平石 賢二 (2010). 母親の養育スキルと子どもの心理的適応に関する縦断的検討. *家族心理学研究*, 24 (2), 171-184, https://doi.org/10.57469/jafp.21.2_106
- 山口 穂菜美・吉本 茜・原口 英之 (2021). 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの研究動向—系統的レビューによるアップデート—. *行動分析学研究*, 36 (1), 67-94
- Yeung, W. J., Sandberg, J. F., Davis-Kean, P. E., & Hofferth, S. L. (2001). Children's time with fathers in intact families. *Journal of Marriage and Family*, 63 (1), 136-154.
<https://doi.org/10.1111/j.1741-3737.2001.00136.x>
- Zhao, N., Zhang, J., & Wang, Y. (2024). The effect of parental and teacher autonomy support on middle school students' career adaptability: A longitudinal study. *Frontiers in Psychology*, 15, 1404478. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2024.1404478>

謝辞・付記

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所所属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「子どもの生活と学びに関する親子調査」の個票データの提供を受けました。ここに厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、公益財団法人発達科学研究教育センターの研究助成を主たる財源として実施し、日本学術振興会 科学研究費助成事業 特別研究員奨励費（課題番号：23KJ1647）からの補助的支援も受けた。